

緑内障の今昔



日野病院名誉病院長 井上 幸次

日野病院の眼科で診察をさせていただくようになって1年になりますが、とにかく緑内障の患者さんが多いのに驚きます。70才以上の1割が罹患しているといわれていますので、年齢層の高い日野病院では当然といえば当然なのですが。

さて、この緑内障という病気、30年以上前と今とでは大きく病気の定義が変わってしまっています。昔は、緑内障というのは眼圧が高くなって、そのために視神経が障害されて視野が狭くなる病気でした。ところが、今は、視神経が弱って視野が狭くなっていく病気が緑内障ということになっています。眼圧は緑内障を悪化させる因子、リスク・ファクターということになるわけです。視神経の強さと眼圧の高さのバランスでことが決まるので、視神経が強ければ少し眼圧が高くても大丈夫ですし（そういう方は高眼圧症とはいえますが緑内障ではありません）。視神経が弱ければ眼圧がたとえ正常でも視神経は弱っていくので緑内障ということになります。これを正常眼圧緑内障といいます。今の日本は眼圧が高い緑内障の人よりも正常眼圧緑内障の人が多のです。

正常眼圧緑内障の人は視神経が弱くて、眼圧が正常なので、視神経を強くする治療をすればよいということになるわけですが、残念ながら現在視神経を強くする治療というものがありません。そのため、正常眼圧緑内障の人でも、悪化の要因となる眼圧をもっと下げるといって治療をしています。眼圧は緑内障を診断する上ではあまり重要ではなくなっているのに、緑内障を治療する上ではひじょうに大事なのです。幸い昔に比べてひじょうに多くの種類の眼圧を下げる点眼薬がありますので、それを組み合わせて眼圧をコントロールしていくことができます。ただそれでも視野が狭くなってくるような一部の方では、手術をしてでも更に眼圧をさげるといってになります。

もう一つ緑内障で変わったのは、以前は「閉塞隅角緑内障」の人が多かったのですが、今は「開放隅角緑内障」の人が多ということ。目の中では常に栄養を含んだ水が毛様体という所で産生されていますが、それが隅角という所から目の外に出て行きます（図参照、矢印が水の流れ）。出て行く所が滞ると眼圧があがるわけです。この隅角がもともと狭い人は眼圧があがりやすく、また、時に突然あがることもあって、その時は眼が痛くなり、頭痛や吐き気を催すこともあります。実は狭隅角の人は瞳が広がると、もともと狭い隅角がより狭くなって閉塞してしまうこともあるのです。そのため、いろいろな体の検査をする時に、瞳孔が開く作用がある薬剤を使う時には「緑内障がありますか」と問診しています。これは実は少し時代遅れといえます。というのは今では多くの緑内障の人が開放隅角緑内障で、正常眼圧緑内障の人は特にそうだからです。

ですので、本当に正しい質問は「狭隅角ですか」と聞くべきなのですが、患者さんは自分の隅角が狭いかどうかわかりませんよね。なので、緑内障があるかという形で広く聞いているわけです。もしも、「緑内障ですが隅角は狭くありません」と答えられる患者さんがおられたら、その人には瞳孔が開く作用のある薬を使っても一向さしつかえないのです。ちなみに白内障術後の人は皆隅角が広がっていることも知っておくとよいかもしれません。

ともあれ、緑内障は早くに発見して適切にコントロールができれば決して怖い病気ではありません。実は視神経が悪くなってくると早期の段階で網膜が薄くなるのが今はわかってきています。日野病院でも網膜の厚みを見ることができるOCTという器械を遅ればせながら導入し、緑内障の早期発見に役立っています。

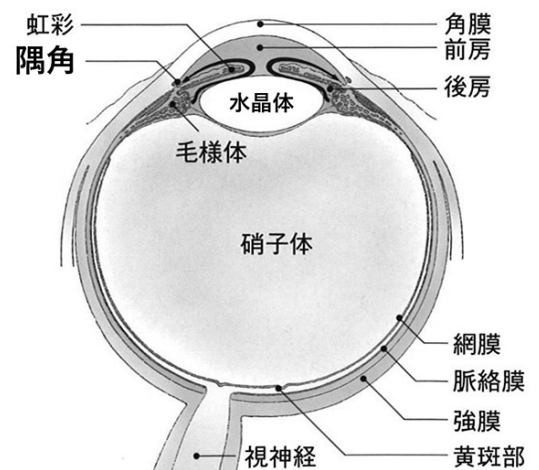


図.眼の構造と眼内の水の流れ